

ファッション誌を「読む」

〈VOGUE〉を巡る人びととアメリカ文化

古賀令子 Koga Reiko



〈新連載〉

第1回

「ファッション誌を読む」まで

●子どものころから身近にあった

現在、大学の「ファッション文化論」を担当する教員として、現代ファッションとメディア（おもにファッション誌）に関する授業を担当し、また研究も進めてきた。その、「ファッション・メディア研究」の最初のテーマが「VOGUE」を読むことだった。近年は、「装苑」を「読んで」いる。

この「ファッション誌を『読む』」という連載では、「VOGUE」を中心に、「たかがファッション、されどファッション」のファッション誌を読むことの面白さ（大変さでもあるのだが）、その一端をお伝えできればと思う。

そして、第1回の今回は、「ファッション誌を読むまで」のプロセス、つまり、私とファッション誌の長い付き合いと、「VOGUE」を「読む」までのいきさつについてもご紹介したい。

ファッション誌は、子どものころから身近にあった。当時は、ファッション誌というよりも、「洋裁雑誌」であった。母は、洋裁が得意で、子どものころの私の衣服は、ワンピースから下着にいたるまでほぼ100%、母の手作りだった。母がどこで洋裁技術を身につけたのかはよく知らない。しかし、子ども時代に、母が洋裁の情報を得るために、当時の婦人雑誌の別冊付録の「スタイルブック」なるものを参考にしていた記憶がある。1960年近くのことだった。

私も見よう見まねで自己流の洋裁をするようになった。簡単なワンピースぐらいは作れるようになり、大学の入学式には、苦心作のスーツで出席した。この頃については、記憶も少しはっきりしていて、私が参考にしたのは「装苑」だった。当時は、「装苑」と「ドレスメーカー」が2大洋裁誌で、わたしは「装苑」がお気に入りだった。



戦後期の「雑誌別冊付録」売店別冊付録のスタイルブックは、雑誌本体と切り離されても流通していた。古本かもしれない。この写真は私が実際に目にした時代から10年以上前のものだが、雰囲気的には近いものだった記憶がある。遠藤武/石山彰『写真にみる日本洋装史』文化出版局、1980より転載。オリジナルは1949年の「アサヒグラフ」に掲載されたもの。

文化学園大学図書館の(国内)

ファッション誌架(一部)

私の学生時代のお茶の水女子大学図書館とは異なり、現在の勤務先である文化学園大学は同じキャンパス内にある文化服装学院とも図書館を共用しており、ファッション関連図書の所蔵は非常に充実している。



川崎市立高津図書館の 女性誌コーナー

ファッション誌というか女性誌のコーナーは、充実しているとはいえないが、私が通学していたころのお茶の水女子大学の所蔵誌はもっと少なかった。ここにも『装苑』はあった。このコーナー全体のバランスの中では、『レディブティック』や『クチーナ』など服の作り方情報誌の存在が目立つ。図書館でファッション誌を見たい(借りたい)という利用者の特徴だろうか? 例えば子ども(少女)ファッション誌の『ピチレモン』は同じ川崎市立の幸図書館で定期購入するなど市立図書館全体で補完し合っている。



『装苑』1967年2月号表紙

表紙を飾っているのは、「ファッション・モデル」時代の山本リンダ。ハーフ・モデルの草分け的存在で、まだ少女らしい初々しさが人気だった。



ちなみに、『装苑 SO-EN』は文化出版局が1936年に創刊した女性向け月刊ファッション誌で「服装の改善とその普及」を目的とした洋裁専門誌としてスタートした、日本では最長命なファッション誌である。『装苑』が文化(服装学院)式の洋裁法を伝えたのに対して、『ドレスメーカー』はドレメ式で鎌倉書房が刊行していた。今は雑誌も出版社もない。『装苑』は、新人デザイナーを対象とした公募ファッションコンテスト「装苑賞」も運営していることもあって、現在でもファッションデザインを学ぶ学生の読者が多い。

中学・高校時代も大学時代も、学校の図書館には、ファッション誌(洋裁誌)はほとんどなかったが、大学(お茶の水女子大学)の図書館には『装苑』があったような記憶もある。大学では「服飾意匠学」を専攻し、研究室には先輩が勤める繊維メーカーから寄贈してもらった(お古の)洋雑誌があった。ここで、初めてフランスのファッション誌『L'OFFICIEL』と『ELLE』に触れたのである。

『L'OFFICIEL』は1921年にフランスで創刊され、1950年から60年代にかけて、最盛期のオートクチュールとともに大きく発展した雑誌である。2005年からは日本版も発行されている。

『ELLE』は1945年にフランスで創刊されたファッション誌で、現在、世界60以上の国で43の版が発行されており、世界最大規模のファッション誌と自称している。日本では1970年にマガジンハウスの『an・an』が提携誌として発行された。私が最初目にした時にはフランス語版しかなかった。1982年によく日本版『ELLE JAPON』が創刊されている。

●ファッション誌に目を通すのが仕事だった

卒業後は、ファッション業界に進んだ。卒業直後は、原宿にオフィスを置く小

1970頃の「L'Officiel」誌「L'Officiel」(プレタポルテ版)1968年3月号(右)と「L'Officiel」(オートクチュールとテキスタイル版)1971年春号当時の「L'Officiel」を文化学園大の図書館で探したら、オートクチュールとテキスタイル版とプレタポルテ版との2種に分かれていたが、私の記憶では当時私が見ていたのはオートクチュール中心で写真がいっぱいの、この両方を合わせたような雑誌だった気がする。別バージョンだったのかも知れない。



「ELLE」誌(1970年)

表紙を飾っているのは、高田賢三のデビュー・コレクション作品。高田も「ELLE」の表紙に取り上げられたことで「メジャー・デビュー」となった。



イメージ・マップの一例

菅原正博「ファッション企画入門」株式会社チャネラー、1992年より。実際には、この図のようなファッション誌の切り抜きのコラージュの上に、生地見本や色見本を貼り込んで、来シーズンに向けて企画しているファッション・イメージを表現した。

さな企画事務所に入り、1年半ぐらいで、今度は大手の繊維メーカーのマーケティング部に移った。そこで10年ぐらいファッション情報分析の仕事を経験した後、アパレル企業に移って、やはり10年ぐらいアパレル商品の企画の仕事をした。この20年余のファッション業界時代は、たくさんのファッション誌に囲まれて仕事をし、ファッション誌に目を通すことが仕事の主要部分でもあった。しかし、ファッション誌を「読む」というよりはファッション写真を眺めて気になったものを切り抜いて自分の企画のための資料としていた。雑誌の切り抜きや手描きのイラスト、色見本や素材見本をコラージュした「イメージ・マップ」や「企画マップ」をシーズンごとに作った。当時、ほとんどのファッション企業が海外のファッション誌を主要な情報源と考えていて、どこの企画室に行っても、必ずといってよいほど置かれていたのが、「ELLE」や「VOGUE」であり、日本の雑誌では「an・an」と「HIGH FASHION」だった。

「an・an」は、マガジンハウス(旧・平凡出版)が発行する女性向けファッション誌で、当初は月2回の発行だった。さきほどもELLEのところで紹介したが、1970年に、「ELLE」の日本語版「an・an ELLE JAPON」として創刊された。それまで主流の「洋裁情報誌」と一線を画してパターンなど洋裁情報をほぼ100%排除した「既製服情報」誌だった。1971年に集英社が「non-no」を創刊すると、両誌による街や観光地特集が反響を呼び、雑誌片手に各地に押し寄せる読者たちは「アンノン族」と呼ばれ多くのファッションの流行を生んだ。1982年に「ELLE」日本語版の「ELLE JAPON」が創刊され、「an・an」



「an・an」1970年3月の創刊号
 右上に当初、提携していた「ELLE」の日本版であることを表す「ELLE JAPON」のロゴと「an・an」マスコット・キャラクターのパンダのマークが見て取れる。



「HIGH FASHION」1970年夏の創刊号
 バリ情報をメインに打ち出して登場し、ヨーロッパのコレクションやデザイナー（日本人含む）作品を中心に「モード系」誌の代表だった本誌の創刊号表紙を飾ったモデルが日本人であったことは今さらながら感慨深い。

は日本のファッション誌として完全に独立した。現在はファッション誌というよりもライフスタイル誌というべきコンテンツで週刊である。

「HIGH FASHION」（1960-2010）は、文化出版局より発行された隔月刊誌で、先行する『装苑』と差別化して、欧米のコレクションを中心に扱い、「モード系」誌の代表的存在だったが、残念なことに2010年4月で休刊となっている。

さて、アパレルの仕事の方は、公私ともイロイロ煮詰まってしまったこともあり、一旦離れることにした。しばらくは、興味があってもそれまではなかなか取り組めなかった本でも読みたいと思い、大学時代の恩師が移られて図書館長を務めていらした文化女子大学（当時）の図書館を訪ねたところ、ちょうど、ファッションの歴史を担当していた教員が転出することになったので非常勤講師を引き受けないかというオファーをいただいた。「ファッション・デザイン史」などの科目を担当することになり、大学時代に学んだことなどほとんど忘れていたので、必死で勉強しては翌週それをしゃべってまた次っという一種の自転車操業のような毎日だった。さらに、文化の図書館には「VOGUE」が揃っているのに「ちゃんと研究する人がいないから、あなたがやって」というご提案というよりは示唆に近いものをいただき、当時は時間もあったので、「VOGUE」に取り組むことになった。実に受動的なきっかけだった。

● 「VOGUE」を読み始める

ところで、「VOGUE」は、後の回でもう少し詳しく紹介することになるが、1892年ニューヨークで創刊された、現在世界でもっとも長命でかつ広く読まれている影響力の大きい雑誌の1つである。1999年に日本版も創刊されている。そして、「VOGUEにみるファッション写真の歴史」とか「VOGUEにみるイ



ラストレーションの変遷』『VOGUEにみる社交界（の変遷）』など、さまざまな『VOGUE』を資料とした書籍（ほとんどは英語で書かれたビジュアル中心の書籍）も数多い。

だから、最初は、何をどう「研究」したらよいか皆目見当がつかず、1年間ぐらい、週に何日も図書館に陣取って、『VOGUE』を「読んだ」。当時、読んでいた『VOGUE』は、草創期の、つまり19世紀末のもので、図書館では「貴重書扱い」であり、図書館員の目の届くカウンター内（書庫内）でのみ閲覧を許可されていた。貸出カウンターの脇の書庫内の薄暗い隅の机でしょっちゅう『VOGUE』と格闘していたので、図書館のスタッフが気の毒がってスタンドを用意して下さったほどである。

ところで、ファッション業界時代は「眺めていた」ファッション誌を、どうして「読む」ことになったのか。ファッション誌の研究にはテキスト分析のほかに、図像分析というアプローチもある。しかし、最初に取り組んだ初期の『VOGUE』は、それまで私が眺めてきた図像主体の雑誌と異なり、圧倒的にテキスト中心だったのである。テキストは、当時のファッション誌らしく、時折フランス語が交じる気取ったもので、その内容は、ファッション関連の情報のほか、エッセイや小説、詩などが、ちょうど、新聞のような入り組んだ割り付けでぎっしり詰めこまれていて、しかもレイアウトは決して上手とは言えない状態で、ある記事のテキストの続きがどこに配置されているのかかなり分かりづらく、正直なところ、決して英語読解力が十分でなかった私にとっては、かなりの難物だった。今思い出してみると、よく投げ出さなかったものだと思う。

「どこをどう研究して論文にしたものだろうか」と悩みつつポーっと「眺めていた」この頃のコンテンツで、私の興味を引き付けたのは、“Answers to Correspondents”という読者投稿欄だった。

『VOGUE』の「読んだ」内容については、次回以降で紹介していく。

(文化学園大学特任教授／ファッション文化論)

現代のファッション誌
現代国内外ともたくさんのファッション誌が展開されているが、ここではこの連載で言及する（予定の）英米とフランス、日本のファッション誌の一部を挙げた。



『VOGUE』1892年の創刊号
創刊号については、実物は見たことがない（調査はマイクロフィルム資料を用いて進めた）。
Mike Evans(編)『Key moments in fashion: the evolution of style』Hamlyn,1998より転載。